

## 父と理系と教職と



旭川市医師会

北海道医療大学 新学部設置準備室(医療技術学部)

幸村 近

昭和一桁生まれの父は国語の教師でした。高校で主に漢文を教えていました。色弱なので理系は諦めたそうです。当時はそういう時代でした。祖父は土木技師で、家族とともに満州に渡ったので、父は牡丹江中学校に通いました。終戦後祖父はシベリアに連れていかれ、祖母と旭川に戻ってきた父は、旧制旭川中学校に転校し、北大文学部を出て、札幌の北海高校に職を得ました。「でもしか教師」という言葉は父から教わったような気がしますが、仕事は楽しそうでした。家に試験答案を持ち帰って採点の赤ペンを走らせていた姿を思い出します。剣道部の顧問をやり、授業も評判が良かったらしく、向いていたのでしょう。後に校長を務めるまでになりました。

家にあるのは国語や中国文学関係の本ばかりだった子供の頃、私は漢字を覚えるのが好きで、漢字テストはいつも満点でした。計算問題もよくできていましたが、ちょっとつまづくこともありましたが、もしかしたら苦手なのかと少し気になっていました。中学までは誤魔化せたものの、高校に入るとバスケット部中心の生活で勉強の習慣が身に付いていなかったこともあり、数学ができなくなりました。物理もダメでした。同期に任天堂の社長になった岩田君がいて、数学も物理も驚異的な点数を取っていました。今にして思えばそういう奴と比べると間違っていたのですが、当時の自分は理数系に向いていないと感じざるを得ませんでした。

父は理系を断念した無念を子に託そうとしたのか、祖父と同じ土木建築系に進むよう言っていたと思います。少なくとも私はそういうプレッシャーを感じていました。理系クラスで物理化学を選んできましたが、このまま工学部に受かったとしても途中で付いていけなくなるだろうという不安にかられ、将来に自信が持てませんでした。既に3年生の夏も終わろうとして文系に鞍替えするには手遅れの時期、そんな頃出会ったのがS君でした。好きな音楽の話をするようになった彼は、勉強も遊びも極めて効率よく、両親が医者で当然のように医学部受験を目指していました。そう、理系でありながら数学や物理を使わなくても済む仕事があったのです。しかも教師と同じく人を相手にする仕事です。私の親戚に医療系の人間は一人もおらず、全く視野の外でした。ここに至って初めて医学部を志すことになりました。

3年生の秋、数Iの因数分解からやり直し、物理

も力学の基礎からやり直し、少しずつ点数が取れるようになっていきました。数学の難しい札幌医大は選択肢から外し、北大は医進にはまだ届かないので父を安心させるために理類を受けておいて、二期校の旭川医大入試までの約3週間必死に追い込みました。さて本番、石炭ストーブの旭川東高の教室で、数学は5題が前後半に分かれて計10問でした。行列問題の後半は全く手が出ないので早々と見切りを付け、90点満点で勝負。微積分の後半問題は残り15分で検算して間違いに気づき、ギリギリで着地しました。神がかりでした。得点源の英語、国語はもちろん、その他の教科も大きなミスなく、もしや合格かと期待した1週間後、ラジオで発表を聞いていると「2375番」の受験番号が読み上げられました。翌日S君たちとキャンディーズの解散コンサートに出かけました。合格したのは私だけではなかったのですが、コンサートの後は私が振舞いました。

卒業生もまだ出ていなかった新設医大に6期生として入学しました。両親の地元である旭川の地は馴染みが深く、楽しく学生時代を過ごしました。そもそも理系が苦手で、人相手の仕事がしたいと思った初心を思い出し、より患者に近いだろうと考えて卒業時には内科を選びました。

それから35年経ち、今は北海道医療大学にいます。2019年4月、札幌あいの里キャンパスに医療技術学部・臨床検査学科を開設します。前職の病院と同じ65歳定年なので、残り6年なのは変わりません。給料も大幅ダウンです。それでも誘いを受けたのは、内科と並行して専門にしてきた臨床検査の領域で、共に働いてきた臨床検査技師を目指す学生を教えたかったから。そして新学部の起ち上げという役目にやりがいを感じています。さまざまな人との出会いやつながりを経て、還暦を前に教育の仕事にたどり着きました。あるいは知らぬ間に父に導かれたのかもしれない。

